

## 日本での半年を振り返る

早稲田大学大学院アジア太平洋研究センター交換研究員 ラルカ ナギー

Raluca NAGY

私が日本に1年間、研究のために滞在すると知った親しい友人たちは、だれもがそのことを羨んだ。なぜなら彼らは皆、日本にくることを夢に見ていたからだ。そのことを思うと、少し申し訳ない感じがする。私は日本の専門家ではないし、また日本で働こうと計画したこともなかったのだから…。でも、ときに1つのことが別のことにどんどんつながって行くということがある。2009年、私のパートナーが示した日本への関心に触発されて、私の中にも日本に行ってみようという考えがふっと沸き上がったが、結局、私たちが訪れたのは別の国だった。まさか日本で暮らす日が来ようとは、本当にそれが実現するまで、思いもよらなかったというのが正直な実感といってよい。

話をもう少し前のことから始めよう。私はルーマニア出身だが、長くブリュッセルでも暮らしていたのでベルギー国籍も持っている。つまり、ルーマニアとベルギーの2つの国籍の所有者だ。これまで経済学と社会学を研究してきたが、これからは人類学を学びたいとも考えていた。ブリュッセル自由大学とブカレストにあるthe National School of Political Scienceで社会学・人類学の二重学位を取得。これまでに7つの国、3つの大陸で暮らしてきた。ルーマニア、モロッコ、ベルギー、英国、そして日本と、これまで実に多くの環境の中で勉強し働いてきた。

今回、日本学生支援機構（JASSO）のご厚意で故国と日本の経験を比較する文章を書く機会をいただいたとき、私は無意識のうちにまずベルギーのことを思い浮かべた。ブリュッセルは間違いなく私が最も長い間、研究生活を送った場所なので、やはり私にとっていちばんよく知っている都市といってよい。その点、ブカレストは2番目に思い出深い街なのだが、記憶という面ではすでに遠い存在になっている。英国のリーズは最も新鮮な思い出に溢れている。というのは、東京に来る直前に過ごした街だからだ。

ところで、なぜ東京に来たのかって？人類学者としての私の主要な関心の1つは「社会流動性」、とりわけ、旅行、移民その他のあらゆる形態における、国境を越えた人間の移動にある。私は一時期、このことをテーマに様々な角度から研究を進めた。ただ、その多くはヨーロッパにおいての、またヨーロッパについての研究だった。そんなとき、それまでの私はいろいろなものや出来事を当然のこととして受け取っていたことに気が付き始めていた。ヨーロッパ並びに欧州連合とその連合国家はきわめてユニークな“機械”であって、そこでは物事がどこにいても同じ方法で起こると誰もが考えがちだ。だから私は、こうした環境を打破し、まったく違った環境で研究してみたいと真剣に考えるようになった。

北米は、文献という点においても、また同僚やその他の学者との交流という点においても、最も馴染みやすいことは間違いない。一方、アフリカとヨーロッパとの流動

性は、あまりにも植民地以降の複雑さに満ち満ちているように私には見えた。それだけに、私の望みとは関係なく、私はいつまでもヨーロッパから遠ざかることができなかつたといつてよい。そんななか、私はアジアのことを考え始めるようになった。社会学においてヨーロッパの研究者は、アジアで起こっていることにほとんど関心を持たない。もちろん、アジアのフィールドワークを選んだヨーロッパやアメリカの人類学者は別だが。多くの人類学者は、1つの国の果てにある小さな村の小さなコミュニティを特別扱いしようとする。だからいくつかの大陸について語る人類学者は奇妙に見えるかもしれない。しかし、ローズベリーという名の作家が簡潔に表現したように、「この谷で起こっていることを理解することは、ほかの谷で起きたことの理解を否応なく促す」というのが私の信念なのだ。言い換えれば「比較する」ことが私の基本的な考えといつてよい。

人生にはときに思いもかけないプレゼントがあるものだ。今回、こうして1年間、日本で研究するという好機を得たことを考えると、このことを強く感じる。ヨーロッパとアジアの大学をパートナーとする「EMビーム」と呼ばれるEUのプロジェクトは、私の“基盤大学”であるブリュッセル自由大学と早稲田大学との間の交換研究員制度を設けていた。その当時、私は英国リーズで大学院修了後の助成コースを終えようとしていたので、もし日本に行くとなると、2012年の予定をすべて変更せざるを得なかつた。それは当時の私にとってはまったく考えもしなかつたことだった。というのも、私が知っている他の地域では、新学期は9月か10月に始まるのだが、日本の新学期は4月に始まるからだった。



早稲田大学構内

日本で研究できるとの知らせがあまりにも急だったため、私は短期間のうちに、日本に行くために多くのことを終え集中しなければならなかつた。準備をする時間もほとんどなく、日本語の基礎を学ぶことすらできない有様だった。その当時、私はロシア語のクラスを取っていたが、2011年9月の時点ではすでに翌年の4月には日本にすることが分かっていたから、今のうちに日本語を勉強しておこうと考えるようになっていた。私は日本研究の専門家ではないし、なかば偶然のように日本にやって来て（ごくありふれた知識のほかに）まったくといつてよいほど日本のことを知らなかつたから、カルチャーショックは覚悟の上だった。

早稲田大学への入学手続きは驚くほどスムーズだった。早稲田大学国際課の松橋雅恵さん（彼女は今でも私にとって“守護神”だ）はまるで魔法のように何でも手際よく準備してくれた。用意された宿舎も本当に快適で居心地のよいものだった。宿舎といえば英国のリーズもとても行き届いていたが、それでもキャンパス内のフラット（集合住宅）を見つけるまでに3週間、待たなければならなかつた。普通は自分で宿舎を見つけなければならぬことを考えると、私はまだ幸運な方だった。ブリュッセルや

ブカレストともなれば、学生の宿舎を世話してくれる人など、大学の事務部門にはただの1人もいない。それは彼らの問題ではないからだ。それがヨーロッパというものだ。

さらに、私のパートナーが夏の2か月間、日本に来たときは、同じ階にあるより大きな、より快適な部屋に移ることさえできた。しかも、彼が帰国したあとは、私が使っていた1人用の部屋に戻ることができた。引っ越しをする人の多くは、それによって物理的・心理的快適さを得られるからに違いない。それに、仕事場まで徒歩5分の距離でありながら、新宿という東京随一の繁華街にも近いという立地。私にはこれ以上、望むものは何もなかった。

私に対する“歓迎体制”は、何から何まで非の打ち所がないものだった。ライブラリーカード、スタッフカード、インターネットへのアクセスのコード、何もかもが迅速な様々な付属品……。私と同じプログラムで来日した同僚もまた、日本に到着して3時間後には完全に居場所を見つけ、また研究を始められる態勢が整ったといていた。



外国人研究者のためのパーティー

早稲田大学国際課は、外国人研究者のために毎月、定期的にテーマパーティーを開催してくれるが、それは同じような立場にある他の研究者を知るうえで絶好の機会を私に提供してくれた。私はそうしたパーティーのほとんどに参加し、おかげでいつも大きな楽しみを味わっただけでなく、世界中から早稲田にやってくる興味深い人々を知ることができた。

ただ、日本語の勉強はかなり問題だった。というのも、それまで交換留学で訪れたどの国でも語学コースを取る必要がなかったからだ。アラビア語が公用語となっているモロッコでさえ、だれもがフランス語を話し、大学での共通語もフランス語だったから語学に困ることはなかった。

意外にも、私が日本語を学びたいという多く人は奇異の目を私に向けた。おそらくそれは、交換研究員としての私の日本滞在期間が比較的短かったからかもしれない（私の同僚はだれもが流ちょうな日本語を話す、それは彼らの日本での経験が長いからだと思う）。

でも、早稲田大学の日本語集中コースで学んだあと、私の理解力は格段に向上した。たしかに日本語は半年間で学べる言語ではないし、私が話す他のどの言語も助けにはならない。日本にいる私は、いうならば文盲の1人といってよいだろう。なぜなら日本の文化はこれまでの私が見てきた文化とはまったく異なっており、また私はまったく読み書きができないのだから<sup>1</sup>。それはまさに、謙虚さを学ぶ絶好の機会といて

よい。会話は何とかなるのに、書かれたものとなるとまったく分からないというのは実に奇妙なものだ。漢字文化圏から来た人にはとうてい理解できない経験だろう。こうした経験のおかげで、日本人が英語、フランス語、あるいは他のインド・ヨーロッパの言語を学ぶことの難しさを理解できるようになった。その意味で、私は3人の日本語の先生方のご努力に深く感謝している。日本語は本当に難しく、私の進歩は本当に微々たるものだったが、今でも日本語を学んでよかったと思っている。



日本語コースの先生とクラスメイトたち

早稲田大学で驚いたことの1つは、早稲田がアメリカの大学の雰囲気の色濃く持っていることだった。もちろん早稲田には“日本の大学らしさ”がいくつもあるが、これほどまでにアメリカの大学の影響を受けていることは正直、予想もしていなかった。例えば、チアリーダーから卓球チームに至るまで様々なスポーツクラブのユニフォーム、早稲田対慶應のサッカーや野球の試合（そしてそのライバル関係）、早稲田祭の雰囲気（それはやはりヨーロッパというよりはアメリカの大学祭を感じさせる）、などなど。それに、それまでは時間（1時、2時のような）によって動いていたので、1時限、2時限というやり方に慣れるのにもしばらくかかった。

日本に来る前は、ITやその他の技術の“先進国”というのが日本のイメージだった。でも、日本での日常的な出来事を見るうちに、それは必ずしも事実ではないと思い始めた。ヨーロッパでのワイヤレスによるインターネットアクセスに慣れていた私は、日本では有線によるアクセス方法に逆戻りせざるを得なかったし、銀行のカードがどこでも使える訳ではないので、商店、レストラン、バー、それに毎月の家賃を支払うためにさえ、いつも大金を持ち歩かなければならなかった。

ここで私の日本での仕事の一部をご紹介します。私を温かく受け入れてくださったのはグレンダ・ロバーツ先生である。ロバーツ先生は私の指導教授であり、私の早稲田大学での受入れを承認してくださった方でもある。私は、日本での最初の日からとても歓迎されていると感じたが、そのことでは私の同僚、特にアイザック・ガーニエに心から感謝している。もしロバーツ先生がいなければ、1回の会議も、1つのイベントも、1片の資料でさえ、私にとって何の興味ももたらさなかったに違いない。ロバーツ先生は、研究助成に加え、私の研究費の一部をカバーできるように1年間の研究奨学金を早稲田から獲得してくださった。

文献利用についていえば、早稲田大学のポータルサイトを利用することで、ヨーロ

ロッパでは考えもできないような論文さえも簡単に読むことができる。文字どおり、世界中のどんな文献でも読むことができるのはまさに驚異的といってよい。日本やアジア研究の専門家にとっては、早稲田大学アジア太平洋研究センターが提供する古典的な書籍コレクションはさらに有益であろう。毎週開かれるセミナーでは同僚たちが研究成果を発表し、そして様々な文献を読むことができるが、それはまた興味深く有用な討論の場を私に提供してくれる。そんなとき、私もまた躍動的な研究チームの一員であることを強く感じることができる。これまで1人で社会学者として研究することに慣れてきた私にとって、これはとても重要だ。

同僚とのピクニック、ディナー、それ以外の活動など、私の“社交”はときにキャンパスの外にも広がる。あるとき私たちは多くの仲間を誘って大山登山に行った。野外の新鮮な空気に触れ、いろいろな人とおしゃべりするのは、いつもの気分を変える絶好の機会となる。こうした課外のイベント・活動のすべてに今でもとても感謝している。



大山登山

今年、私の指導教授がサンフランシスコで開催される米国人類学会総会のパネルディスカッションを運営することになっており、それに私も参加する。現在私は、ヨーロッパの社会学雑誌のためにある特集の編纂に参加しており、日本での実績のおかげで、日本に関係する私の3つの論文がヨーロッパと米国に慣れた読者のために収録さ

れることになっている。私はまた、日本の国境問題というテーマをアジアとの関連で論ずる北海道大学のサマースクールにも参加した。

ヨーロッパを出てそれまでとは違った視点で物事を見てみたいという私の念願は、こうして完全に満たされた。日本はヨーロッパとはまったく異なっているが、同時に似たような傾向を見ることができる。それはまさにローカルを越えてグローバルに近づいている状況を見ているようだ。日本に来てからの私は、日本への、そして日本からの流動性を理解しようと、またこの魅惑的な国をもっと理解しもっと知ろうと、いつも努めてきた。

だがしばしば私は、永遠に“迷えるティーンエイジャー”のように感じることもあった。これまで学んだ多くのことを、まるでハードディスクを消去するように忘れ、まったく新たに始めなければならない…そんな感覚といえばよいだろうか。だが今は、ほかのことは別として、差し当たって私の記憶を視覚とサウンドスケープ（音風景）に限定することにしよう。私は今も、東京そして日本を「驚き」という言葉以外で表現することはできない。多くの友人たちからブログを書くように勧められているが、その概念が好きになれないことに加え、書けるとは思えない。日本はブログで表現できるような国ではないし、わずかな期間しか滞在していない私にはとてもそのような資格はないと思うからだ。

日本を旅行する外国人が日本滞在中に経験することをはたしてどのくらい理解しているのか、私はときどき疑問に感じることもある。あの映画「ロスト・イン・トランスレーション」で描かれていたすべてのもののように、ネオンに輝くモミの並木の大通り、はじめての花見、カラオケ、歌舞伎、秋葉原、日本式トイレ、地震、蝉の鳴く夕方、そしてありふれた日本に関する知識などはみな、文脈全体を理解しなければ単なる感覚的印象でしかない。また、日本での体験は“細部”にこそより深い意味があると私は考える。例えば、傘を入れるための透明なビニール袋、透明なビニール製の傘（空が見えるので圧迫感が少ないし、何とシンプルで素晴らしい）、などなど。あるいは、どのお店にもある小銭用の小さなトレー。あるいは、ガソリンスタンドの天井から下りてくる給油ホース。

私は高田馬場という街が好きだ（ちなみに「ババ」という言葉はルーマニア語で「おばあさん」という意味で、私の知る限りルーマニア語と日本語に共通する唯一の言葉だ）。巣鴨も私のお気に入りの街だ。巣鴨はお年寄りが多く住む街として有名であり、私は日本のお年寄りも好きだ。彼らの朗らかで健康的でおおらかで、そして人生を楽しんでいる様にはいつも本当に驚かされる。そして日本の赤ちゃんも私は大好きだ。お気に入りの環境で研究を続けながら、魅惑的なこの国についてもっと知りたいと思っている。

#### 注

<sup>1</sup> この記事は、筆者が英語で執筆した原稿を和訳したものである。